

ほすぴっ人

耕和会、この3年を振り返る。

2020年、オリンピックイヤーから始まった新型コロナウイルス感染症の世界的な蔓延は、耕和会にとっても新たな船出となりました。

ワクチン接種、感染防止対策、行動制限、窓越し面会などは今でこそ日常用語となりましたが、前途多難の中では心が折れそうになりながら「もう少しだから、がんばろう」と声をかけ合い、試行錯誤を繰り返し、何度もピークを乗り越えてきた3年間だったと思います。患者さま・利用者の皆さまの安心と安全を守ることを第一に、現在もそれぞれの現場において、「感染しない・広げない・持ち込まない」ためのあらゆる対策を講じながら日々奮闘しています。

そのような中でも歳月は流れ、城ヶ崎では8年越しで架け替え工事を終えた小戸之橋が開通、大淀川河川敷花火大会も2年ぶりに開催されるなど、周辺にはわずかに以前の風景が戻り始めています。先の見えない中、不安や不自由なこと多くありましたが、非常事態の中で紡がれた新たな取り組みや嬉しい知らせもあったこの3年を振り返ります。



(写真) 難局突破への祈りを込めて、各事業所からサンヒルきよたけへメールと感謝のメッセージが届けられました。

ハ工一四
信用が飛んでいく

不安や不満はいつの世も決してゼロにはならない。耕和会の各事業所で発生する不安や不満に関する事案については、事例ごとに慎重な検討を行い、それを緩和し、組織の混乱を回避すべく方策を講じている。

その一つは職場環境改善推進室、労務安全管理室、コンプライアンス室による個人面談である。関係する全職員に個別の面談が行われ、その内容は最終的に理事長に報告されている。面談に要する時間は一事案あたり数十時間に及ぶなど、大変な作業である。

面談の主眼は傾聴である。事実関係の確認による不安や不満の緩和策である。

傾聴は耳である、口ではない。口より高い位置にある耳を使う。黙つて聞いて個々の行動の意味を知る。その上で解釈し判断する。診療で弱者や非健常者に接するよう部下にもそう接したい。の場である、活用いただきたい。

即決できない事案は、疑問を解いてから判断する。木を見て森を見て、そこから適材適所の判断もできる。はやらず、具申（ぐしん）も誤を決めずと進めたものである。うつかりは相手を傷つけ、我が身も傷つける。

報・連・相が欠かせない理由はこれにある。

認知の偏りは判断を誤らせる。先入観は偏見を生む。一人でスピード的に解決しようと、判断経験則に基づいた決定をすると判断を誤る。

評価には良し悪しや好き嫌いの感情が含まれている。自分の認知の歪みや偏りをチェックすべきである。

絶え間ない報・連・相で培った実績である。課題をチャンスと捉える心と、未来へチャレンジする前向きな姿勢である。

さて信用とは何か。

これはリーダーにも共通する。



社会医療法人耕和会
社会福祉法人耕和会
理事長 迫田 耕一朗
さこだこういちろう



社会医療法人耕和会 広報誌「ほすぴっ人」第303号 2023年(令和5年)1月25日発行
発行:社会医療法人耕和会 本部 広報部 〒880-0917 宮崎市城ヶ崎3-2-1
TEL 0985-51-3627(直通)FAX 0985-51-0075 E-Mail : honbu@kowakai.jp



2021.03
小戸之橋開通



介護老人保健施設
サンヒルきよたけ
施設長 櫛橋 弘喜



迫田病院
病院長 佐々木 誠一



社会福祉法人 耕和会
特別養護老人ホーム
城ヶ崎小戸の家
施設長 黒木 勝久

この3年は、コロナ感染症と介護保険改定のライフにおける電子カルテシステム導入のため、大変かつ重要な年がありました。科学的介護の実践と地域包括システムにおける中心的施設の役割の実践は、コロナ禍のためとどこおらざを得なかつたことが残念です。終息後は地域包括システムの中心的施設として役割を果たしていく所存です。

Withコロナへの移行は自然の流れではあります、その中で高齢者・重症化リスクのある患者様をいかに守っていくかが病院や高齢者施設における大きな課題です。今後、コロナへの対応にも変化があると思いますが、3年間で蓄積された多くの経験をもとにスタッフ一同、柔軟に対応してまいります。

わたしたちの歩み



宮崎市赤江地区
地域包括支援センター
所長 古川 拓矢

“すべてを患者さまのために
すべてを利用者のみなさまのために”

耕和会

497 名
総勢

のスタッフが協働しています！
※2023年1月1日現在



迫田病院
ほほえみ保育園
園長 丸山 登志子

新型コロナウィルスが流行りだしてからの3年間、マスク着用が当たり前の日々となりました。しかしながら乳児はマスク着用が出来ない上に距離を保つ事が難しい為、常にクラスターの不安を感じながらの保育となりました。これからはコロナとの共存となります。園児の健康状態の把握や保育士の健康管理・消毒の徹底など行うことで子ども達が楽しく笑顔で過ごせるようにしていきたいと思っております。

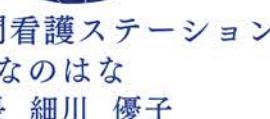


グループホーム
太陽の丘
所長 川名 峰幸



赤江在宅介護支援センター
所長 渡邊 伸江

新年早々、ホームへのコロナ感染で気づかされたことがあります。ユニットで感染症が起きた際、自らマスクを着用されたり、スタッフと同じ格好をして消毒作業を手伝ってくださる利用者さまの姿がありました。マスクをつけること自体に違和感がない様子から介護スタッフが意思伝達の方法について葛藤してきたことや、通年行ってきた消毒作業も無駄ではなかったのだと思いました。私たちを見てくださっていたことに感謝の気持ちでいっぱいです。これも3年間の取り組み成果と捉え、スタッフ一同を労ってあげたいと思います。



城ヶ崎訪問看護ステーション
なのはな
所長 細川 優子

この数年、新型コロナに翻弄され皆様も大変なご苦労があったかと思います。経験した事の無い予測不能な毎日。今までの価値観や常識、方法が通用せず、私達も試行錯誤しながら過ごしてきました。まだまだ先は見えませんが皆様の大切な時間を、共に歩むステーションでありたいと思います。